



## 果樹園の管理

八月になるとりんご、もも等の極早生ものは収穫期に入る。収穫期に近づいたからといって気を弛めると、思わぬところで病氣や

害虫にやられて、大失敗をすることがよくある。夏季はわれわれ人間と同様に果樹もまた障害をおこし易い。細心の注意を払って管理に努めよう。

### 病害虫の防除

りんご……袋掛時期以後の病害は「カッパン病」等が主で、雨の多いような年には多発することもあるが、亜鉛石灰液あるいはこれに銅剤を混入して撒布すれば防除することができる。むしろこの時期には病氣よりも害虫に厄介なものがある。すなわち「アカダニ」「シンクイ虫」「キンモンホソガ」等である。アカダニは高温乾燥期に入ると旺んに繁殖し、七月下旬頃から被害が目立って来るものである。他の病害においても同様のことであるが、特にダニは葉の同化能力を減退させ、果実の肥大、品質、さらに翌年の花芽のつき方にも影響が大きいため、充分注意しなければならない。「リンゴハダニ」「ダイズハダニ」に対してはEPN(旭の若い葉には葉害を生ずるから用いぬこと)、ホリドール等がよいが、「オオトウハダニ」も加わり三種のダニが混在するときにはフェンカプトン、アカール等を用いるがよい。またオウトウハダニだけの時は、石灰硫黄合剤、サンソーゲン等が安

価でしかも効果が大きい。但し硫黄剤は温度が高いと葉害を生じ易いから、朝夕等の温度の低い時に撒布するようにしなければならない。

シンクイ虫は主として「モモヒメシンクヒ」であるから有袋栽培のものについては問題にならないが、無袋栽培の場合は八月上、中旬から九月上旬にかけて、二回目の発生時期であるから、時期を失しないようにDDT水和剤、または亜鉛石灰液を撒布しなければならぬ。今一つシンクイ虫が問題になるのは、早生品種の収穫に先立つて、着色のために除袋をした場合である。二度二回目の産卵期に当るので、注意しないと除袋後に産卵されて、思わぬ損害を招くことがある。被害の恐れがある場合は、着色に影響を及ぼさないDDT等を主剤として、除袋と同時に薬剤を撒布しておく必要がある。何れにせよシンクイ虫の被害果は見つけ次第水浸して、発生密度を下げるように心掛けねばならぬ。

キンモンホソガは葉肉に潜入して加害するので、アカダニ同様葉の機能を損うから適期を逃さず防除しなければならない。大体七月下旬から八月にかけて発生が多くなる。薬剤としてはホリドール、EPN等の接触剤がよく効く。

また「ハマキ虫」等の防除にDDTを頻繁に使い過ぎると天敵が殺されて、ハダニや「メン虫」の発生が多くなるから注意しなければならない。この点砒酸鉛は古い農薬ではあつてもその心配がなく、しかも持続効果が長い。

なし……病害に大したものではなく、害虫としては「オオシンクイ虫」「ハダニ」等がある。特に前者は八月上旬、中旬にかけて芽の部分に産卵し、孵化した幼虫は新芽の中に喰入つてその中を害する。防除は春の萌芽時と八月の孵化幼虫に対してホリドール等の接触剤を撒布すると甚だ効果がある。

アカダニの多い場合はアカール、フェンカプトン等を撒布するがよい。ぶどうは「晚腐病」「黒痘病」等の多発する地帯では、薄いボルドー液あるいはザラム等を撒布することと「コガネ虫」等に注意を払う程度で本道の場合大した問題はない。コガネ虫には砒酸鉛がよい。

### 花芽の分化と一般管理

栽培されている果樹の大部分のものは、七月から八月にかけて翌年の花芽を形成する。花芽ができなければ果実の生産は望めぬわけであるから、花芽の分化を妨げぬように充分注意してかからねばならぬ。また花芽の分化が始まって次々と「ガク片」「花弁」「メシベ」「オシベ」等がつくられて、始めて明年の役に立つ完成された花芽になるのである。従つて分化発達の途中で不適當な環境、天候不良、管理の不適當に置かれると、落芽すなわち外見は花芽であるが内容に花を持っていない、いわゆる「中間芽」になつてしまう。これは花芽が多いといつて喜んでしまうと、開花した結果は葉芽であつて、全く「タヌキの皮算用」芽で、果樹栽培上大いに警戒すべきものである。花芽の健全な発達を阻害するような条件としては次のようなものがある。

(1) 葉の障害。すなわち病害虫に侵されたり、葉に葉害を受けたような場合は、葉で作られる同化栄養分が不足し、その年の果実を發育させるのが精一杯で、翌年の花芽にまで養分をつぎ込むゆとりがない、というわけである。

(2) 天候不良、あるいは枝の混み過ぎによる樹冠内部への日照不足。葉に当たる光線が不良であると、やはり栄養分の生成が不足し(1)の場合同様の理由から花芽の形成に支障をきたす。天候不良を人力で云々できないが、徒長枝の整理、さらに間伐を考慮すること等により、各枝に均等に光線が充分当るようにしなければならない。単位面積当りの樹の栽培本数の多いことが、増産の途には決してならない。

アメリカのカリフォルニア州がご承知のようにオレンジ類を始め、各種の優秀な果実の特産地である。その第一条件は、湿度が少く常に空氣が澄んでいて、充分な光線を果樹が受け入れえるためであるといわれている。

このことでも解るように、一にも二にも葉に充分光線を当てるように工夫することが、果樹の品質改善あるいは増産の要訣である。

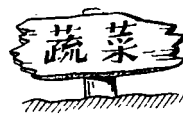
(3) 花芽分化期に入つてからの窒素肥料の過多、旱害、果実の成らせ過ぎも花芽の発達に悪影響をおよぼすので充分注意しなければならない。

### その他

つぎに早生品種の着色、熟期促進、落果防止に二・四・五・T Pが非常によく効くか

らお奨めする。時期は収穫の一カ月前、濃度 $200\text{PPm}$ (五万倍)で果実に直接かかるように噴霧器で散布する。これを使用した場合の注意として、散布したものは一日〜二週間早く着色し、熟期に達するので、このようなものは順次収穫することが大切である。このままで長く樹に置くと、早生品種の場合すぐに過熟状態に陥りやすいからである。

(北大 T・T)



### 床土の準備

苗床の跡片付けの時踏込材料を掘りあげて堆積してあることと思いますが、準備していない場合はおそく

とも八月始めに腐熟堆肥を積上げ、無病の山土や、田畑の心土を掘上げてはさみ、翌年の床土を準備する。積込みの際、堆肥の腐熟促進と土性改良のために石炭を混ぜるのも良い。堆肥と土の割合は育苗する苗の種類と使用する土によつて異なるけれども、半々くらいに積込むと良いが、一般にウリ類の床土は堆肥をやや多めにする。

なお良い床土をつくるためには十月末迄に二〜三度の切返しを行い、堆肥の腐熟を促進するとともに不足と思われる養分を補充しておく。

### 秋播ネギ・ゴボウの播種

葱は生育期間が長く、一年葱(寒地では越冬不可能)の石倉一本太葱等を春播しても、播種を早め、トンネルか温床で育苗し

て、相当肥培に努めないと年内に充分肥大しないものである。それで越冬可能な二年葱の加賀一本太葱、札幌根深太葱を秋播して翌春から肥培すれば、秋早くから収穫することができる。

播種時期は八月下旬が適期で、これより早く播くと臺立ち遅れると年内の苗の太りが悪く越冬率も悪くなる。この時期は乾燥しやすく、気温も高いので稚苗時の生育がかんまんであるから発育を促進するため、堆肥を多施できれば灌水する。なおタマネギバエの被害のある地帯では九月にもウジが発生して被害を与えるのでヘブタクロール、アルドリンの撒布を忘れないように。

ゴボウも八月下旬から九月月上旬にかけて播種すると翌春臺立ちすることなく、丁度品薄時の六月下〜七月上にかけて収穫できる比較的越冬しやすいものであるが、秋末迄に充分株張りをさせないと軽い土や、積雪の遅い年は傷むことがあるから速効生肥料を施す等、年内の株の発育を図るようにすることが大切である。

### ホーレン草の播種

翌早春とりすなわち、越冬播のホーレン草の播種も今月の作業である。越冬播の可能な品種はミンスターランド種を除いては思わしいものはない。播種時期は八月下旬から九月初旬が適期で札幌の場合、九月十日過ぎに播種したものは一〇%くらいしか越冬せず、翌春の生育も思わしくない。

### 葱の土寄せ

葱の土寄せは葉鞘部を伸ばすため、この伸びた部分を軟白するために行うものであるが、ネギの生育に対しては良い影響を与えるものではない。また労力の面から見ても多くの手間がかかる作業の一つである。

土寄の回数については、伸長に伴わない何回も行った場合、回数を一〜二回に減らしたものに比べ、白根は伸びるが発育は劣り、収量は減少するといわれる。ところで特に一年葱の様に分蘖しない。生育旺盛な種類は一〜二回程度の土寄を行つても、葉鞘の縁を除いた程度で軟白の意味がなく、極めて太い堅い質のものしかとれない。従つて土寄は回数を減らした方が良くからといって極端に回数を減らすよりは、三〜四回行つた方が良い。

土寄の方法は、第一回目は定植後一カ月位経ち葉身の分岐点が植溝の上に出る頃を見計らい、溝が平らになる位行う。その後二十日置きに二〜三回土寄せする。土寄に当つては葉身の分岐点に土がかかない程度を限度として行う。最後の土寄せは、品種、収穫期によつて異なるが、収穫一カ月前位に行うべきで、この場合軟白が目的であるから、分岐点の上三〜六センチ土を覆う様にする。いづれの場合でも寄せる土は土塊をくだいて丁寧に行うべきである。

### 秋の病害虫対策

トマトやキュウリを秋晩くまで成らせるに

は疫病や露菌病の徹底的防除を行うべきで、普通八月一杯薬剤撒布に努めると九月に入つて一〜二回の撒布でこれ等病害はある程度防ぐことが出来る。

ハクサイやカンランでは九月に入つてから、露菌病、黒斑病が多発するから、肥切れせぬ様、特にハクサイでは九月上旬までに生育状態を見て追肥に努め、旺盛な生育を図ると共に薬剤撒布に努める。ハクサイはポルドウで葉害が出るから水銀剤とかダイセンまたはウスブルンの千倍液を撒布する。

ホーレン草の露菌病にはダイセンかボルドーを撒布する。ただボルドーは葉を汚染するので出荷の際、醋酸二〇〇倍につけておとす。

害虫としてはアオムシが夏から引続いてハクサイ、カンランに被害を与えるので、常に発生を見ながらDDTの粉剤か、マラソン乳剤を撒布する。BHCでは効果が稍劣る様である。

九月以降被害の著しい害虫にヨタウムシがいる。ヨタウムシは雑食性のものであるが、秋のハクサイ、カンラン、ダイコンに大害を与え大きくなつたものは結球葉の中心まで喰入り、昼間は地中や根際潜伏してなかなか薬剤では防除が困難なものである。小さいうちは大緑色で葉の裏で食害し、シヤクトリ虫の様に歩き、手をふれると糸を吐いて垂下する性質がある。防除するにはこの小さいうちにDDT水和剤の五〇〇倍またはDDT粉剤、マラソン乳剤の千倍等を撒布する。(なかはら)